集

俳句フォーラム

2017年7月 第64号

白山句会

地球儀　浦川哲子

春暁や枕草子諳んじる
母と娘に流れる月日雛納め
小面に宿る妖しき花の昼
一本の古木に対比花見かな
地球儀の小さな日本黄砂ふる

野水仙　都築繁子

初茜浮かぶタワーに手を合わす
樹木葬の冬の金柑撓なる
鉄柱も溶けし戦渦や野水仙
水温む亀が重なる石の上
みつをの詩心にきざみうららけし

東京大空襲忌　田中藤穂

霾晦人とはぐれてビルの街
踏んでゆく下萌東京空襲忌
姫辛夷都塵すこうし葩に
鈴掛は去年の実あまた春の空
たんぽぽを踏まねば道へおりられず

福寿草　平野無石

仏壇へ届く日の尾や蜜柑むく
喜寿傘寿はみんな若造福寿草
生きていることが灯水ぬるむ
ひっそりと南極の石花菜風
晴れわたる空東京の空襲忌

鷺　植木やす子

七草の揃わぬ粥や息災に
北斎の江戸は遠退き春浅し
着ぶくれて歩幅もゆるり北斎展
亀鳴くや南極の石公園に
昼うらら鷺も眼を閉じ佇みて

花ミモザ　工藤はる子

箱根路の母校応援屠蘇干して
くもり空そこだけ明し花ミモザ
北斎の女振り向く春の宵
戦を知らず真白な梅開く
しでこぶし枝より透ける空青し

春の鷺　篠田純子

笑皺二本増えたり初鏡
場所入の鬢付の香の淑気かな
胸の羽根風に靡かせ春の鷺
良き言葉胸に開きて春きざす
見つめられ見つめていたり猫うらら

余韻　大山夏子

寒に入る老舗佃煮三代目
墨東のビルに湯屋あり余寒まだ
木の芽風ことばの余韻噛みしめる
冬木芽の満ちし頭上に鴉二羽
白鷺の泥の抜き足水温む

宝井其角と私

篠田純子

私の生れは中央区日本橋茅場町で、時代は異なりますが、宝井其角の住まいと同じ町内です。芭蕉亡き後茅場町で「江戸座」を開き俳諧を牽引した其角。荻生徂徠とも交流があったのでしょうか。

梅が香や隣は荻生惣右衛門　其角

私の実家は運送業で、物心のついた頃には、店にはオート三輪車がありました。升本という酒問屋の倉庫から、酒の銘柄の書かれた厚手の前掛けを肩に当て、一升瓶の並んだ木枠をひょいと担ぎ上げる、ポパイみたいな力瘤のある従業員もおりました。

其角の旧居跡は今は銀行になって居ます。

話に依るところでは、その辺りに「きかく」という屋号の料亭が在ったと言うことです。私の子どもの頃には「きかく」は中央区中洲に移転していました。

私の友人のF子ちゃんのおばあさんは、活け花の先生で「きかく」の玄関や床の間の花を活けていました。

ある年の二月に、初午の催しがあるとのことでF子ちゃんのおばあさんが、F子ちゃんと私を「きかく」

へ連れて行ってくれました。
庭のお稲荷さんを参り、大広間でご馳走を食べながら、演芸を見ました。テレビに出ている芸人さんもいて、目の前で歌ったり笑わせたり。「きかく」ってすごいと、大興奮した思い出があります。
F子ちゃんのおばあさんは、乳母を連れて嫁入りしたという方で、品のある人でした。一緒に歌舞伎座に行く時は必ず黒の紋付の羽織を着て行き、髪は与謝野晶子のように結い上げていました。F子ちゃんと私はお弁当とジュースが目的ですから、ロビーで遊ぶためにやたらと「ご不浄に行って来る」を繰り返し、芝居は時々観ているという有り様でした。
中村時蔵の弟子の一人が切符の斡旋をしていて、その人の案内で、揚幕から奈落、舞台へと、見学させてもらった事がありました。
ちょうど忠臣蔵のかかっている時で、造り物の猪がその辺に転がっていたり、定九郎が撃たれる所の藁束の匂いを嗅いだり等、懐かしい思い出です。赤穂の討入りと言えば、其角は浪士とも交流があったようです。

年の瀬や水の流れと人の身は　　其角
明日待たるるその宝船　　大高源吾

其角の旧居跡に隣接して、赤坂日枝神社のお旅所があります。二年に一度の本祭りの折には、赤坂の本社から鳳輦（ほうれん）の行列がやって来ます。
鳳輦は屋根の上に金の鳳凰の飾りのある天子の乗る車で、それに続いて神輿、山車、宮司さんの乗った馬車などが氏子町内を巡ります。
お旅所では昼の休憩を取りますが、馬達も、境内の裏手に繋がれ休息します。覗くとにんじんをもらったり、撫でてもらったり寛いでいます。白馬に見とれたり、鼻をブルルッとするのを、遠くから見て楽しみました。
さほど広くはない境内に、鳳輦や神輿、士卒や巫女が溢れかえり、賑やかなことこの上ないほどです。近隣には証券取引所、銀行、証券会社、澁澤金庫とビルだらけなのですから、境内の様子はまるでタイムスリップしたようです。
其角もきっとこの祭りを見たのではと、想像するだにうれしくなります。

五月雨や傘に付きたる小人形　　其角

雨の日本橋川を猪牙舟で行く其角を想像します。芭蕉庵に行くのかしら、それとも吉原かしらん。

藤の会

振り返る

大山夏子

初日待つ海深ぶかと蒼き色
地球儀を回し領土の寒き夜
春風邪何事もみな曖昧に
春の闇亡母の声に振り返る
コロッケを買って菊坂うららけし

観覧車

石川賢吾

しはぶきて独りの闇を深めけり
白壁の剥げし土蔵や実南天
紅梅や開けはなたれし甘味処
一村の菜の花明り汀女句碑
凍返る空押し上ぐる観覧車

海苔

江口九星

海苔の香の春をはうばる朝の卓
かもめ来て都心の川で春あさり
土凍てる母の面影畑仕事
凍て土を起こせばかたし遠き音
庭隅にいつのまにかある蕗の薹

バイカル湖

渡辺節子

バイカル湖海と呼ぶ民春浅し
古庭に母の薫りす沈丁花
草木より空春色を深くして
幸薄き画家の棲家や梅の花
土ボタル洞窟で観る祝い月

大津波

中川のぼる

大雪や列島北側沈みこむ
深遠のまぶた閉じたる涅槃西風
やわらかき水寒明けの深海魚
春の日や海馬に残る大津波
あさぼらけ唯静寂の雪柳

初日の出

伊藤昌枝

思わずに姿勢正して初日の出
寒晒土塊天地返しては
土の香を丸ごと寒のほうれん草
楽隊の抱えるホルン黄水仙
海鳴や東北遅き春を待つ

冬銀河

楠本和弘

裸のマハ睡る岬の冬銀河
鳰の海枯葉にまじる鐘の声
竜臥した冬の銀河の五丈原
切岸や鳶反転の春一番
陽炎や蹴鞠の弾む二の鳥居

風信子

吉宇田麻衣

年初め集まる子らの背くらべ
書初めや力尽くして心晴れ
初旅やちょっと晴れ間の青き海
風信子植え替えみれば深呼吸
冬空へ向きかえて飛ぶ鳥の群れ

温き頬

渡部恭子

夜空澄み楷書で始める初日記
ほのほのとねんねこ寝息里帰り
水底の寒鯉の待つ時の音
心中にまだ温き頬椿落つ
あるがまま彼岸は夫の七七忌

たんぽぽ

小沢えみ子

しんがりは気まま七福神めぐり
寒稽古靴の硬さも新しき
春愁や海辺を鳥の横歩き
スカートの襞ととのえて卒業す
たんぽぽや白きボールを投げ返す

海となる

酒井たかお

菜花摘む房総半島海光る
春炬燵ずぼらをきめて書を積みて
いぬふぐり絵を描く人の座も埋めて
残照の蘇州や菜の花海となる
花ミモザ庭に干したるベビー服